

# **クラスでできる支援ヒント集**

**～ 通常の学級での配慮ある指導を目指して～**

**山形県教育庁義務教育課**

## はじめに

「個別に指示するとわかるのに、一斉だとなかなかわかってもらえない。」

「物音や掲示物等に注意がそれてしまい、学習に集中できない。」

「一度決めたルールにこだわり、ルールの変更に抵抗を示したり、守れない友達を激しく非難したりする。」

以前からこのような話をよく耳にしていたものです。

小・中学校の通常の学級に在籍している児童生徒のうち、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合が、文部科学省の全国調査（平成14年）によれば約6.3%、山形県の調査（平成18年）では約6.2%という結果があります。この全国調査の結果は、従来の特殊教育が対象としてきた児童生徒の約4倍にあたるものです。私たちは、通常の学級において非常に多くの児童生徒が支援を求めていることを、まず理解する必要があります。

また、特別支援教育をすべての学校で推進していく意味では、「特別でなくなる」必要があります。その際、特別支援学級やその担当者に「頼む」姿勢から、一人一人の教員が「自ら取り組み・かかわる」姿勢への転換が求められます。

特別な教育的ニーズに応じた教育を推進するためには、通常の学級での配慮ある指導が不可欠です。その時に参考にする資料として、この「クラスでできる支援ヒント集」を作成しました。この中には、通常の学級における児童生徒に対する支援のヒントが詰まっています。是非活用していただき、特別な教育的ニーズに応じた教育をそれぞれの学校で推進していただきたいと思います。

平成19年 3月

県教育庁 義務教育課長  
鈴木 弘 康

# 「クラスでできる支援ヒント集」目次

はじめに

目次	1
I 本資料の活用にあたって	2
II 子どもへの支援	
1 「聞き取りが苦手な子ども」への支援のヒント	4～5
2 「話すことが苦手な子ども」への支援のヒント	6～7
3 「読むことが苦手な子ども」への支援のヒント	8～9
4 「読み取りが苦手な子ども」への支援のヒント	10～11
5 「文字を書くことが苦手な子ども」への支援のヒント	12～13
6 「文章を書くことが苦手な子ども」への支援のヒント	14～15
7 「図形のとらえ方が苦手な子ども」への支援のヒント	16～17
8 「運動が苦手な子ども」への支援のヒント	18～19
9 「忘れ物が多い子ども」への支援のヒント	20～21
10 「友だちとのトラブルが多い子ども」への支援のヒント	22～23
11 「落ち着きがなく集中できない子ども」への支援のヒント	24～25
12 「自分を抑えることが苦手な子ども」への支援のヒント	26～27
13 「人との関わりが苦手な子ども」への支援のヒント	28～29
14 「集団での活動が苦手な子ども」への支援のヒント	30～31
15 「会話がつながらない子ども」への支援のヒント	32～33
16 「特定のことにこだわりがある子ども」への支援のヒント	34～35
17 「片付け・整理整頓が苦手な子ども」への支援のヒント	36～37
III 参考になる資料	38
おわりに	39

# I 本資料の活用にあたって

## 1 本資料の構成について

本資料は、よくある子どものつまずきとそれらに対する支援のヒントを、それぞれ見開き2ページずつにまとめ、どのページからでも見ていただけるようにしました。目次には特別の支援を必要とする子どもの姿を一覧にしていますので、みなさんが担当している子どもの姿をイメージしながら、必要なページを探して読んでいただいても結構です。

## 2 「子どもへの支援」について

各項目は、それぞれ、以下の項目から構成されています。

### (1) 「子どもの具体的な姿」

子どものつまずきの様子を具体的に表しました。

### (2) 「理解のヒント」

子どもの行動や状況の背景にあると考えられる主な要因について整理したものです。

### (3) 「支援を考えるためのヒント」

子どもの特性に応じて考えられる主な支援のポイントをまとめました。

### (4) 「事例（右ページ）」

学校で実践した具体的な支援の事例を取り上げました。

## 3 活用上の留意点

- (1) 各ページに載せた様々なヒントは、あくまでも例です。これらの例をもとにして、一人一人の子どもへの支援を吟味していくことが大切です。
- (2) 個別の支援が必要な子どもには、学年や学校全体で話し合っ（校内委員会等の活用）、全教職員や学級の子どもたちと協力して支援することが大切です。

## Ⅱ 子どもへの支援

# 1 「聞き取りが苦手な子ども」への支援のヒント

## 子どもの具体的な姿

- ・ 耳の聞こえ方には問題がないのに、話の内容を聞きもらすことが多い。
- ・ 個別に話すと分かるが、大勢の中だと理解していないことが多い。
- ・ 指示されたことにはうなずくが、誤解していることが多い。
- ・ いつも周りの友だちがやっている様子を見てから行動する。

## 理解のヒント

- ◇ 「聞き取りが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 声や音、言葉などを聞き取ることが苦手である。
  - ・ 話に注意を向けて聞くことが苦手である（話し手の様子、友だちの声や学習の道具等、話以外のことに注意をうばわれやすい）。
  - ・ 記憶をしばらくの間、とどめておくことが苦手である。

## 支援を考えるためのヒント

「聞き取りが苦手な子ども」は、「聞く気持ちが足りない」「わざと違うことをしている」「自分からやる積極性が足りない」等の誤解を受けがちです。「聞き取り」が苦手な子どもに配慮した話し方や聞く態度づくり、その子の得意な力（見たり触れたりする力など）で補う等の観点から支援を工夫しましょう。

### 1 聞き取りやすい伝え方に留意する。

- (1) 子どもが分かる言葉を使って話す。
- (2) ゆっくり、はっきり、簡潔に話す。
- (3) 指示は、一つずつ伝える。

### 2 話に注意を向けさせていく。

- (1) 子どもに小さく呼びかけてから話す。
- (2) 学級全体への話の後に、子どもに個別に同じ指示を繰り返す。

### 3 記憶力の不足を助けるための工夫を図る。

- (1) 実物・絵・写真・動作などの目からの情報（視覚的な情報）を併用して伝える。
- (2) 話のポイント（キーワード）などを板書する。
- (3) メモをとる習慣を身につけるように指導する。

### 事例1 [ことばや音の聞き取りが苦手な子どもへの支援の工夫]

授業の際には、以下のことに留意した。

- ① 授業のポイントや友だちの意見をキーワードとして板書する等、文字で補う。
- ② 全体説明の後、子どもの近くで、その子の表情などから話への集中度、理解の程度等を確認しながら話し、活動の理解を図る。(理科の観察等、他のことに集中している場面では個別に伝える、しっかりと話し手に注意を向けさせる等してから説明する。)
- ③ 友だちの発言内容を、子どもが分かりやすい簡潔な表現にし、「〇〇さんの意見は△△ということなんだね。」というように繰り返す形にして伝える。

### 事例2 [3つのキーワードで指示を印象づける]

指示を受けとめることが苦手な子どもに配慮して、指示内容を簡潔に印象づけるために、3つ以下のキーワードを、3本の指を用いながら指示を伝えるようにした。

- ① クラス全体に「①トイレ、②着替え、③グラウンド」と、人差し指・中指・薬指の順で指差しながら伝える。
- ② 最後に、子どもと一緒に人差し指を指さして「いち、トイレ…」と確認をする。

### 事例3 [「時間割ボード」を使った日程説明]

今説明した内容をすぐ忘れてしまうことが多く、友だちの行動を見てから行動する子どものために、大切な言葉を書き残し、それを見て行動できるよう、「時間割ボード」を使うようにした。

「○校時」「授業名」の隣に「準備」欄を設けて、教師が準備物や活動場所を書きながら説明し、休み時間に入る時に必ず確認するようにした。

## 2 「話すことが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 簡単な質問にも、話し始めるまでに時間がかかり、単語で返答することが多い。
- ・ 質問の意図に合わない答えをすることが多い。
- ・ 「あれ」「それ」などの指示語が多く、話が相手に伝わらないことが多い。
- ・ うまく考えがまとまらず、事実を関連づけて話すことが苦手である。
- ・ 友だちとの話し合いに加われないことがある。

### 理解のヒント

- ◇ 「話すことが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ うまく伝えられなかった失敗経験のため、話すことに不安や抵抗感がある。
  - ・ 記憶する力が不足している。
  - ・ 状況にあてはまる適切なことばがすぐにみつからない。
  - ・ 話す内容を整理したり、順序立てて話を構成したりすることが苦手なため、どのように答えればよいか分からない。
  - ・ 「…です。それは～だからです。」などの基本的な話し方が身に付いていない。

### 支援を考えるためのヒント

話しやすい環境の中で、うまく伝えることができたという成功経験を積み重ねることができるように支援を工夫しましょう。

- 1 話しやすい雰囲気づくりに努め、話して伝えることができた経験を積み重ねていく。
  - (1) リラックスして話ができる時間を設け、担任との信頼関係づくりや受容的な学級の雰囲気づくりに努める。
  - (2) 話すことをせかさず、本人のことばから伝えたい内容を推測したり確認したりして受け止めるとともに、ことばを補って全体に伝える。
- 2 本人の話しにくさや記憶の弱さを補う工夫をする。
  - (1) 発問内容や応答に必要なキーワードを板書して目で確認できるようにする。
  - (2) 答える内容を選択肢で具体的に示す。
- 3 経験した内容を写真や絵、文字などで時間の経過にそって掲示し、内容を目で確認しながら順序よく話すことを経験させる。
- 4 話す内容のひな型を示す。
  - (1) 事前に文章化してから発表できるようにする。
  - (2) 指名する順番に配慮して、1～2名の友だちの答え方を聞いてから答えられるようにする。



## 事例1 [リラックスして会話を楽しむ機会を設けた例]

学級には、発言が苦手だったり、友だちとの会話に入れなかったりする児童が3名いる。担任が話しやすい存在になることと、話して伝えることができた成功経験を味わわせ、話すことに自信をもってほしいと考えて、以下の取り組みをした。

- ① 朝や帰りに、特に3名には、挨拶に加えて、天気や服装や食事、身近な出来事など、答えやすい簡単な質問をして、会話の経験を積ませていく。また、子どもの話が広がるようことばを必ず添えながら、楽しい雰囲気を経験させていく。
- ② 休み時間に、それぞれが得意なことや関心のあることなどを話題にして、ゆっくりと向かい合って会話を楽しめるようにする。本人の関心のあることについては、保護者からも積極的に情報を提供していただくようにする。
- ③ 給食時の担任の席を、曜日毎に各班を回るようにし、話をする時間を設ける。その際、周囲の子どもを巻き込みながら会話を楽しめるように、対象の子どもが話しやすい話題で、ことばを補いながら会話をつなぐようにする。

## 事例2 [授業中話すことができるようにする様々な工夫]

子どもの「話す」ことへの苦手意識等を踏まえ、以下のような様々な取り組みを状況に応じて行った。

- ① 話し始めるまでに時間がかかる子どものために、答えのはじめのことばを話のきっかけとして提示し、答えを誘導する。
- ② 答え方をよく理解していない子どもには、発問の最後に「『○○です』と答えましょう。」などのことばを添える。
- ③ 考えがまとまりにくい子どもには、選択肢を提示する。
- ④ 感想などを尋ねると「おもしろかったです。」と一言で答えがちな子どもには、答え方のパターンを示す。例「○○が△△したところが、おもしろかったです。」
- ⑤ 答える内容を予めノートに書いてから「読む」形で発表させる。

### 3 「読むことが苦手な子ども」への支援のヒント

#### 子どもの具体的な姿

- ・ 「ぬ」「め」、「ク」「ケ」、「人」「入」等、形の似た文字の判別がすぐできない。
- ・ 一字ずつであれば読めるが、単語として意識できず、読み方がたどたどしくなってしまう。
- ・ 文字をとばしたり、付け加えたり、文末を変えたりして読んでしまう。
- ・ 行をとばして読んだり、同じ行や前の行を繰り返し読んだりする。

#### 理解のヒント

- ◇ 「読むことが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 文章を読む際、文字のまとまりを単語として瞬時にとらえられない。
  - ・ 自分の思いこみや、似ている文字を勘違いして、自分なりの読み方をしてしまう。
  - ・ 目で文字を追う力が弱く、前後左右の文字に視線がそれてしまうため、今読んでいるところがわからなくなってしまう。

#### 支援を考えるためのヒント

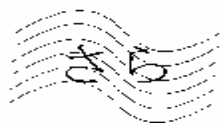
文字などの視覚情報に対する認知の仕方や眼球の動き、一時的に記憶を保持する力などをふまえ、様々な工夫を図ることが求められます。

- 1 文字のとらえやすさに配慮する。
  - (1) フラッシュカードで単語のまとまりをすばやく読む練習を行う。
  - (2) 漢字が読めない場合は、教師がふりがなをふる。
  - (3) 文章を分ち書きにしたり、行間を広めにとったりしたプリント等を用意する。
  - (4) 教科書の文章で、文字のまとまりごとに／線(スラッシュ線)を引いたり、線で囲んだり、マーカーで色別にしてあげ、単語を意識できるようにする。
- 2 文字の認知の仕方等に焦点を当てた支援を考える。
  - (1) 注意を向けるべき文字とそれ以外の文字や背景の色などの違いを見分ける練習を行う。
  - (2) 文の中から、特定の文字や単語を素早くさがす練習を行う。
  - (3) 文字を素早く目で追うことができるような練習を遊びの要素を取り入れて行う。
  - (4) 他の行に視線が移らないように、定規を当てたり、読む行だけが見えるような補助教具を活用したり、アンダーラインを薄く引いたりしながら読む練習を行う。
  - (5) 文の長さを一文から二文、三文のように徐々に長くして黙読や音読の練習を行う。
- 3 音読場面での支援を工夫する。
  - (1) 教科書等を一齐で音読をする際は、読んでいる部分を指し示していく。
  - (2) 教師がまとまった文字や文を読んだ後に続けて読む、一緒に声を出して読むなどして、読むことへの苦手意識の解消に努める。

## 事例1 〔朝の会 ～日直による毎日の3分クイズ～〕

形がよく似た文字を判別したり、単語としてまとめて読んだりする力等が全般的に弱い子どもがいるので、クラス全員が楽しく取り組めそうな活動を取り入れた。

- ① ひらがなやカタカナの50音表、漢字カードを掲示する。カードの中から、指示棒で文字をいくつか指し、その順序通りに1つの単語として読んでいく。意味のある単語での問題ができるようになったら、単語の数を増やしてもできるようにする。
- ② 果物や動物などを、フラッシュカード用の単語として取り上げ、眼球をスムーズに動かす練習、文字をつなげて記憶する練習に結びつけていく。
- ③ 波線を等間隔に引いたり、薄く影をつけた中に文字を書いたりして、何の文字かを当てる。



- ④ クイズ感覚で、列ごと答える、班対抗戦で答えるなどの工夫を図っていく。

## 事例2 〔授業中 ～音読時の支援～〕

漢字はある程度読めるが、ひらがなが続くにつまづいてしまう子どものために、学校では、自分の思いこみで読まないように、指で文字を追いながら黙読（音読）する、ひらがなで書かれた単語にスラッシュ線を入れたり線で囲んだりして、他のひらがなと区別できるような支援を行ってきた。家庭とも連絡し、自分もできるという経験を味わわせるために、以下のような点を大切にしながら取り組んだ。

- ① 一人で練習できるように、教科書を拡大コピーして渡し、それに書き込めるようにする。
- ② 音読で間違いやすいことばに印をつける。
- ③ 自信を持って読めるように、時には明日読むところを事前に伝え、その際、範読したテープを渡し、聞きながら一緒に読む練習ができるようにする。
- ④ クラス全体で友だち達とペアを作り、友だちと一緒に読む活動を意図的に取り上げ、読みの苦手な子どものプライド面にも配慮していく。

## 4 「読み取りが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 文章は読めるが、内容の理解（読解）にかかわって「いつ、誰が、どこで、何を、どのように（5W1H等）」といった基本的な内容が読み取れない。
- ・ 「これ」「それ」等の指示語の意味がよくわからない。
- ・ 文の内容をすぐ忘れてしまい、問題文や文章を繰り返し読まなければならない。
- ・ 何を聞かれているのか、その文のキーワードになることばがすぐに分からないために何度も読み返してしまう。

### 理解のヒント

- ◇ 「読み取りが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 文章の中の文字を、まとまりのあることば（単語）として認識できない。
  - ・ 単語と実物を結びつける力が弱い。
  - ・ 読むことだけに集中してしまい、内容を理解するまではいたらない。
  - ・ 読み進めてきた内容を一時的に記憶し、その上で文を読み進めることが難しい。
  - ・ 文章は読めるが、段落相互の関係や、接続語の意味がわからない。 等

### 支援を考えるためのヒント

文章題は読めるのに何を聞かれているか分からないという経験の積み重ねが学習意欲の低下を招いていることも考えられます。理解を進める手がかりやポイントを提示し、やればできるという自信を持たせていくことも大切な支援になります。

- 1 ことば・単語段階で「そのことばの意味すること」の理解を図る。
  - (1) 文を読む時、内容にあった写真や絵を同時に提示する。
  - (2) 単語をフラッシュカードにし、絵カードを選び取る（その逆も）ゲームを行う。
  - (3) 文を読む前に、「質問」を知らせ、読み終わってから改めて質問する。
- 2 文章の内容を理解しやすくするための工夫を図る。
  - (1) 接続語の分類や使い方等についての基本的な考え方について掲示する。
  - (2) 文章の基本的な内容（5W1H等）について、書き込み用プリント、質問内容を箇条書きしたプリント等を事前に配布したりして、書き込みながら学習を進められるようにする。
  - (3) キーワードが分かるように、線で囲む、マーカーで印をつけるやり方等を教える。
  - (4) 段落の相互関係を図で表したり、事実と心情などの違いが分かるよう印をつけたりして、自分で読み進める方法を教えていく。

### 事例1 [国語の文章題]

文章は比較的上手に読めるのに内容の理解が十分にできない子どものため、日頃から次のような支援を心がけた。

- ① 教師が側に立って、読んでいる部分を指でなぞったり、大切な箇所を指し示したりする。
- ② 物語文、説明文等で、補助線の使い方を日頃から指導しておく。
  - ・主人公のことは二重線、それ以外の登場人物は一本線、心情については波線等。
  - ・事実、意見・考えごと文頭に違う印をつける等。
- ③ 段落の上に番号をつける、大切な文やことばを○で囲む、線を引くなど、読み取りの際に大切にしたい事柄を具体的に示し、再度読んだり考えたりする時の手がかりにする。

### 事例2 [算数の文章題]

計算問題はできるが、文章題になると、なかなか解けないAさん。次のような支援を行った。

- ① 図や絵等を用いて、視覚によるイメージ化を図って、理解の手助けとする。
- ② キーワード（例えば、「加える」「分ける」「全部で」や数字等）に印をつけさせる。
- ③ 必要に応じて「分けると」なら「わり算」であるといったパターン化した問題文の理解の仕方を取り上げる。
- ④ おはじき、棒、タイル等を具体的に操作することで、文章題の内容を理解することができるようにする。

### 事例3 [休み時間 ～個別にふれあう時間の中で～]

比較的短時間で楽しみながら取り組めそうな課題を、やりとりしながら取り上げた。

- ① 簡単な文とその文の内容がわかる絵や写真を用意し、読んでその内容を説明する。
- ② 文を読み、その内容が表す方の絵や写真を選択させるなどのゲームを取り入れ、文章を読むことへの苦手意識を減らしていく。
- ③ なぞなぞを紙に書いて出す。それを読んで答えるようにする。

## 5 「文字を書くことが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ ひらがなやカタカナが鏡文字になる。
- ・ 「ン」と「ソ」、「シ」と「ツ」等、似ている形の文字の書き違いがある。
- ・ 「先生が言いました」「先生が行きました」など、同じ音の漢字を間違える。
- ・ 文字のバランスがうまくとれなかったり、ノートの枠におさめて書いたりすることが難しい。
- ・ 板書をノートに書き写すのに時間がかかる。

### 理解のヒント

- ◇ 「書くことが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 注意してみる、形の違いを正しくとらえるといったことが苦手である。
  - ・ 文字を記憶しておくことが苦手である。
  - ・ 目と手の協調した動作が苦手である。
  - ・ 文字を思い出し、書くことが苦手である。
  - ・ 指の力の入れ加減がうまくできず、運筆にぎこちなさがある。

### 支援を考えるためのヒント

- 1 形をとらえることが苦手な子どもには、簡単な形を見分ける学習等を取り入れる。
  - (1) 文字表記に合わせた歌をつくり、歌いながら覚える。
  - (2) 似た文字をカードに書き、違いを見分ける。
- 2 文字を思い出すことができない子どもには、ひらがな・カタカナ文字カード等を準備し、いつでも見て確かめられるようにする。
- 3 書き写すことが苦手な子どもには、書き写す量を加減したり、学習プリントなどを準備したりする。
  - (1) 板書の中で、ポイントになることだけを書き写すように指示する。
  - (2) 学習内容の簡便なプリントを準備し、「どこに」「何を」「どれだけ」書くかを示す。
- 4 運筆等にぎこちなさがある時には、筆記用具に配慮する。
  - (1) 鉛筆は芯の濃い、使いやすいものや大きめの消しゴムを用意する。
  - (2) ノートは本人が無理なく書けるように、マス目の大きいものや罫線の引いてあるものを準備する。
- 5 パソコンなどの活用も考える。

### 事例1 [書き順をことばにしながら]

漢字を読むことはできるが書くことに苦手意識があり、また、実際に書くと文字のバランスが崩れてしまう子どもに、「よこ」「たて」「はね」など、書き順にしたがい、運動の方向と書き方をことばにしながら学習を進めた。

例 「右」は「ななめひだり」「よこ」「たて」「おれ」「よこ」と、ことばにしながら書き取りの学習を行った。

### 事例2 [学習用具の工夫]

筆圧が弱く自信なさそうな字を書くAさんは、書くスピードもゆっくりで、書いた文字はノートの線の間になまこおさめることができない。そこで、次のような支援を行った。

① 力が弱くても書きやすい鉛筆を準備する。

鉛筆は、B、2Bの鉛筆を準備し、書きやすい方を選ばせる。また、鉛筆を持ちやすくするために、スポーツで使うテーピング用テープを巻いて握りの部分を太くした。

② 4分割のマス目ノートを活用する。

これまで使用していたノートでは、マスの中心をとらえることが難しい状態だった。そこで、Aさんと相談して、ノートを4分割されたマス目のものに替えた。

### 事例3 [文字比べ]

形の似た文字（例えば「ね」と「れ」と「わ」など）を混同して書いたり、ひらがなを書くと鏡文字になったりする。たくさんの文字を一斉に取り上げると混乱するので、文字を見てその違いを短時間で見分ける力を育てるために、個別指導の時間に次のような学習を行った。

① 1文字ずつ書かれたカードを数枚用意する。教師が別に用意した1枚の文字カードを提示する。子どもは数枚のカードから同じ文字カードを選ぶ。この時、準備するカードには鏡文字で書いたものも入れておく。

② 1文字カードを3秒間提示した後、カードを裏返しにする。次に正解のカードと他にもう1枚の形が似たカードを示し、子どもが正しい方を選ぶという活動を行う。

## 6 「文章を書くことが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 作文の時間は、書き始めるまでに時間がかかる。
- ・ 体験したことを話すことはできるが、文章に表すことは苦手である。
- ・ 「楽しかったです」といった、決められたパターンの表現になる。
- ・ 主語や述語が抜けた文章になる。

### 理解のヒント

◇ 「文章を書くことが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。

- ・ 知っていることばの数が少ないため、文章を書くことが苦手である。
- ・ 体験したことを記憶したり、思い出したりすることが苦手である。
- ・ 「何を」、「どのように」書けばよいのか分からないため、「思い出してみよう」「その時どんな気持ちでしたか」など、尋ねられても答えることができない。
- ・ 順序立てて説明することが苦手である。

### 支援を考えるためのヒント

「文章を書くことが苦手な子ども」は、書きたいことがたくさんあっても、何をどのように書いたらよいのかうまく整理できていないことが考えられます。その子の言語能力を見極めながら、抵抗感なく、少しずつ表現する力を高めていきましょう。

- 1 書きたいことを説明する（話す）ことから始める。
  - (1) 子どもが話したことを教師が書き取る。
  - (2) 聞き取ったことを、教師が書き出し、整理して子どもに示す。
- 2 書くことに慣れるようにする。

初めから全て書かせるのではなく、穴埋め作文にしたり、書くポイントを作文用紙にあらかじめ書いておく。書く量を本人に抵抗がないようにする。
- 3 写真やビデオを活用する。

思い出すことが苦手な子どもには、活動の様子を撮ったビデオや写真を見せて、思い出す手がかりにする。
- 4 題材として、話しやすい、書きやすいものが何かを把握する。
- 5 学習プリントにあらかじめ項目を記入し、それを見ながら順序立てて書くことができるような工夫をする。



### 事例1 [質問カードを見ながらの文章づくり]

作文の時間になると何をどのように書いたらいいのかわからず、作文が進まないAさん。そこで、Aさんと話をしながら文章を作るようにした。

題：「運動会」

T：「いつ」運動会がありましたか。

T：「どこ」でしましたか。

T：「なに」の種目に出ましたか。

T：「おもしろかったですか」「疲れましたか」「楽しかったですか」

一問一問ゆっくりAさんに尋ね、Aさんが答えたことを、最初は教師が作文にする。少し慣れてきたら、質問カード（1枚のカードに「いつ」「どこで」「だれが」「何をして」「どう思ったか」などを記入したもの）を順に見ながら、文章を書く練習をした。

### 事例2 [写真を手がかりにして]

Bさんの文章は「〇〇しました。楽しかったです。」のパターン化された表現になることが多く、具体的な場面を思い出しながら書くことに困難が見られる。そこで、体験した活動の写真を用意し、それを手がかりにして作文の学習を進めた。

① 写真を見ながら、Bさんが話したことを教師が短冊に書く。

例 畑にそばの種を植えました。

小さい種でした。

そばうちをしました。

私は、2杯食べました。

② 写真を見ながら話したことを書き終わったら、本人に短冊を選ぶように伝える。

③ 選んだ数枚の短冊を見ながら作文にする。

### 事例3 [帰りの会]

書くことへの抵抗を少なくするために、帰りの会で「一行作文」を書くことを続けた。

① 連絡帳に、今日あった出来事で一番印象に残っていることを一行書く。

② 日によっては教師がキーワードを板書し、キーワードについて一行書く。

キーワードは、学校生活にかかわることばや感情を表すことばなどにする。

③ 慣れてきたら、当番の子どもが板書した好きなキーワードについて一行書くようにする。

## 7 「図形のとらえ方が苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 展開図が描けない。
- ・ 垂直、平行などの理解ができない（向き合う面・交わる線が探せない）
- ・ 作図の手順は理解できるが、描けない。
- ・ 表やグラフを正確に読めない。
- ・ 長さが正確に測定できないことや、奥行きイメージができない。

### 理解のヒント

- ◇ 「図形のとらえ方が苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
  - ・ 空間における図形の認知が弱い。
  - ・ 目からの情報を処理することや抽象的な図形を捉えることが不得意である。
  - ・ 図形の全体を把握することが不得意で、一部だけに集中してしまう。
- ◇ 自分の得意な力を使って学習を進めていくことも大切です。
  - ・ 「言語で表現したり、言葉を聞いたりして、順番に物事を考えること」が得意な場合、定義や作図の方法を覚えることは得意な反面、立体図形や展開図の理解が不得意な場合が多い。
  - ・ 「目で見たり、具体物の操作活動を取り入れたりして考えること」が得意な場合、実際に手にとって目を見て図形を捉えたり、視写したりすることは得意な反面、言語で説明された図形を頭の中でイメージすることは苦手な場合が多い。

### 支援を考えるためのヒント

- 1 「言語で表現したり、言葉を聞いたりして、順番に物事を考えること」が得意な場合
  - (1) 図形を見て、「たて・よこ・底辺・高さ」などと言葉で説明する。
  - (2) 作図の順番を絵描き歌のように言葉で説明する。
  - (3) 図形の定義（辺や頂点の数）を確かめる。
- 2 「目で見たり、具体物の操作活動を取り入れたりして考えること」が得意な場合
  - (1) 教師と一緒に実際に展開図から立体を作成する。
  - (2) 奥行きと高さなどの長さを実際に測る。
  - (3) 様々な方向から立体を観察し、それぞれ見え方が違うことを理解する。
  - (4) 完成した立体図形を分解して辺や頂点の数を確かめる。

### 事例1 [算数] ～三角形と四角形を弁別する支援～

三角形と四角形の区別ができない子どもの中には、「言語で表現したり、言葉を聞いたりと、順番に物事を考えること」が得意で、目で見えて理解することが不得意な場合がある。そこで、次のような配慮を行った。

- ① 三角形と四角形の定義をまとめて表を作る。

三角形：「3つの線（辺）からできています。

3つの頂点もあります。」

四角形：「4つの線（辺）からできています。

4つの頂点もあります。」

	線（辺）	頂点
三角形	3	3
四角形	4	4

- ② 形の条件をまとめた表を使って、三角形や四角形の辺（プラスチック棒）、頂点（シール）の部品で作成する。その後、数を間違っていないか確かめる。
- ③ いろいろな図形板を使って、三角形・四角形で辺や頂点の数に注意して分類する。部品に注目することで、形の特徴を一つずつ確認し、目に見える形で言語化することで、得意な考え方を活用することができる。

### 事例2 [展開図を作ることを通して直方体を理解する]

- ① 未完成の展開図を完成させる。
- ・ どの辺、面が足りないかを実物を見て考える。
- ② 完成した展開図を組み立てて、直方体を完成させる。
- ・ 6つの面があるかを子どもと一緒にさわって確かめる。
  - ・ 向かい合っている2つの面が同じ大きさになっているかを比べて確かめる。

### 事例3 [社会] ～地図記号を覚える工夫～

地図記号が覚えられない子どもは、似ている記号で間違いが目立つため、以下のようなことに取り組んだ。

- ① 地図記号カードと絵（写真）カードの2種類を準備する。絵や写真は、地図記号が連想しやすいようなものにする。絵カードは地図記号の形でくり抜けるようにして、パズルのようにはめることができるように作成する。
- ② くり抜いた絵カードと地図記号カードを使って、パズル形式ではめる。
- ③ 白地図に絵や文字を書いて、適切な地図記号シールを貼る。
- ④ 形を意識して覚えられるようにして、いろいろな地図記号カードで練習する。

## 8 「運動が苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 歩き方がぎこちない（片方に重心がかかっているような歩き方をする）。
- ・ 歩くときに左右同じ手足が動く。
- ・ ボールを受け取る時、後ろにそらしてしまう。
- ・ はさみを使って線に沿って切ることが困難である。
- ・ 大縄が回っているときにタイミングよく入れない。
- ・ 走り幅跳びで、踏み切り板に合わせられない。

### 理解のヒント

- ◇ 「運動が苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 目で見て動きをまねることが苦手である。
  - ・ 左右を間違えることが多い。
  - ・ 自分の体をうまくコントロールして動かすことが苦手である。

### 支援を考えるためのヒント

「体力・筋力が不足している」等の誤解を受けたり、「怠けている」と捉えられがちです。運動が苦手な子どもの困難さに配慮しながら、自分の体のイメージをつかめるような指導が効果的となります。

- 1 自分の体のイメージをつかむ。
  - (1) 自分の手足がどのくらいの長さなのか、絵を描いたり測ったりして確かめる。
  - (2) 音に合わせて、左右の手足を動かす練習をする。
- 2 バランス感覚や空間を使って活動を通し、自分の体を意識できるような力を育てる。
  - (1) ケンケンパ、平均台、縄跳びをして、バランス感覚を高める。
  - (2) 大きなボールを使って、体全体でキャッチする。
  - (3) マット上で体全体を回転する。
- 3 タイミングよく動作する力を育てる。
  - (1) 徒競走のスタートでは、音だけでなく目で見てわかる合図をする。
  - (2) 動きを言葉に置き換えて口ずさみながら、テンポに合わせる。
  - (3) 音楽に合わせて、動作を止めたり動かしたりする。

### 事例1 [朝の会 ～右・左の感覚を育てるための支援～]

左右の意識や弱く、左右に動く動作も苦手で、ズックに左右の文字を書いておいても間違えることがあるため、次のような取り組みを行った。

- ・ まず、机の上に鉛筆・消しゴム・ものさし・赤鉛筆・のり(小さな文具)を準備する。
  - ・ 次に、机を半分に区切るラインを作っておく。
  - ・ 教師は、「鉛筆は左」「ものさしは右」・・・と指示を出す。
- ① 子どもは、教師の言葉を聞いて、文具を机の左右に正しく移動する。
  - ② 後ろを向いて友達の机を借り、①と同様教師が指示を出し、それにも応じる。  
(教室の景色で左右を覚えていることがあるため、後ろを向いたやり方にも取り組む)
  - ③ 友達の机を2つ合わせて同様に行う。
  - ④ これらが正確にできるようになったら、教室全体を使って、自分が左右に動く活動を取り入れ、体全体で左右の意識を深められるようにする。

### 事例2 [体育 ～表現運動での支援～]

表現運動やダンスで、モデルの動きをまねることが苦手な子どもは、前の動きが消えてしまうために記憶にとどめられないことや、目からの情報を理解することが苦手で、連続する動きの模倣が特に不得意である。そこで以下のような2つのことを試みた。

- ① モデルの動きをまねることの支援として、連続する動きを写真にして静止画として提示する。静止画には一枚ずつ番号をつけて、それぞれの動きを捉えられるようにしておく。
- ② 教師は、動作を「前から後ろにまっすぐ・・・」「左足を一步前に出して、すぐに右手・・・」などと言語で表現する。子どもはその言語を復唱しながら動作を行う。このようなことで、動作と言語を関連させて記憶を助ける活動を積んでいく。

### 事例3 [休み時間 ～バランス感覚等を高めるための支援～]

特にバランス感覚や手と足を協調させて動かすことが不得意な子どものために、バランス感覚を高めるための動作が自然にできるように、体育館に次のようなものを設定した。

- ① マットを3～5枚長く敷いておき、前転や側転をさせ、回転の感覚を味わわせる。
- ② 高さの違う平均台や凹凸の板を設置し、その上を歩かせ、バランスの感覚を味わわせる。

## 9 「忘れ物が多い子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 教科書やノートをよく忘れる。
- ・ 宿題をやってくるのをよく忘れる。
- ・ 決められた宿題や提出物を出すのを忘れる。
- ・ 特別教室での授業に、必要なものを持っていくことを忘れる。
- ・ 整理整頓が苦手で、どこに何があるか分からなくなっている。

### 理解のヒント

- ◇ 「忘れ物が多い子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 何を持っていくのか忘れてしまう。記憶する力が不足している。
  - ・ 連絡事項をよく聞いたり、板書を見たりする注意力に困難がある。
  - ・ 前もって準備をする習慣、自分で確認する習慣ができていない。
  - ・ 保護者に学校からの配布物や連絡帳を見せる習慣ができていない。
  - ・ 宿題の量や内容が子どもの負担になっている場合がある。

### 支援を考えるためのヒント

「忘れ物」が多い子どもの支援には、「理解のヒント」が複数重なっている場合があります。家庭の協力を得ながら進められると、より効果的になります。

- 1 メモを取り、準備と確認の習慣化を図る。
  - (1) 連絡帳などを用意して、メモを取る習慣を身につけるようにする。
  - (2) メモに書いたことと、持ってきたものを照らし合わせ、忘れ物がないか自分で確認する習慣を身につけるようにする。
- 2 家庭の協力を得ながら進める。
  - (1) 連絡帳を見ながら、子どもと一緒に必要なものを準備する時間を取ってもらう。その際、一緒に準備する時間を取る、決めた時間に保護者が声をかけ一人で準備するといったように、段階的に進めるようにする。
  - (2) 用意することができたら大いにほめる。小学校低学年の子どもたちでできた時に、シールを与えることも効果的である。
- 3 宿題の分量と内容に配慮する。
  - (1) 宿題は、本人が自分の力でできる分量と内容にする。
  - (2) 宿題をする習慣が身につけていない場合は、ほんの数分で完了できる内容を毎日続けるようにする。やってきたらほめ、自信とやる気を育てる。

### 事例1 [学級全体での帰りの会]

4月初め、学級全体で忘れ物をなくすために、帰りの会の時間に「明日の予定と持ち物」を確認する時間を設けた。

- ① 学級の子どもたち全員が連絡帳に「持ち物」と「今日の宿題」をメモする。
- ② 連絡帳を見る時間と持ち物を準備する時間を家の人と相談して各自決める。

連絡帳にメモすることはできるが、連絡帳を見ることを忘れてしまうAさんには次のような支援を行った。

- ① 連絡帳ではなく、ランドセルを開けるとすぐにわかる透明なケースに「持ち物シート」を挟むようにする。
- ② 「持ち物シート」には準備したら丸をつける欄を設け、自分でチェックできるようにする。
- ③ 翌日に、忘れずにもってきた時には、「持ち物シート」にご褒美シールを貼り、ほめることを続けた。

### 事例2 [家庭の協力を得て]

学習用具の準備をする習慣、学校からの配布プリントを家庭で見せる習慣を形成するために、初めのうちは、家庭の協力を得ながら進めた。

- ・ 時間を決めて家族の方から声をかけてもらう。
- ・ 一人で準備できたときには、一言ほめてもらう。

以上、二点だけをしばらく続けていただきたいことを、Bさんの家庭だけでなく、学級便りや懇談会等の折に保護者全体に伝えた。また、家庭で困っていることは、連絡帳や電話でいつでも遠慮なく学校に知らせてほしい旨もあわせてお伝えした。

### 事例3 [教室移動]

特別教室での授業で持ち物を忘れやすいCさん、学級全員での取り組みになるように、次のような手立てを取った。

- ① 黒板に今日の予定を書き、「持ち物」欄に黄色のチョークで持っていくものを記入する。低学年で、絵や写真の方が分かりやすいときには、写真カードを使って貼っておく。
- ② 教室を移動する前に、「持ち物」欄を見て準備するように声をかける。
- ③ 「持ち物」を準備できた場合には確認し、ほめる。

## 10 「友だちとのトラブルが多い子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ ちょっとしたことで、相手をけなしたり邪魔したりする。
- ・ 学用品をめぐるトラブルが起きる。(なくなった。かくした。取った取られた等。)
- ・ ルール無視を級友からとがめられて、叩いたり悪態をついたりする。

### 理解のヒント

- ◇ 「友だちとのトラブルが多い子ども」を理解するために、次のような点も考えてみましょう。
- ・ 友だちと親しくかかわりたいが、その場の状況把握や確認が不十分なため、相手の意図を汲み取れず、自分に悪意をもっていると思い込み、勘違いによる言動もある。
  - ・ 自分の持ち物を確認して準備することが苦手だったり、机の上が乱雑なために必要な物が見当たらなかつたりして、たまたまなくなった物を他児の所為にしてしまう。
  - ・ 行動や欲求のコントロールや自分の行動を振り返ることが苦手なため、ルールの理解不足から突然活動を中断したり、ルールを理解していても、自分の都合でそれを無視してしまう。
  - ・ 自分の思いや気持ちをことばでうまく伝えることが苦手な子どもは、友だちからとがめられると、つい興奮して乱暴な言動になってしまう。

### 支援を考えるためのヒント

学童期に起きるトラブルは、自分の意思を主張する他人の存在を知ると共に、自己を意識し、社会生活にはルールや協力が必要なことを学ぶ機会になります。友だちとのトラブルも、自分自身を見つめることや自分とは違う相手を理解することを学び、さらに望ましい解決を学ぶ場にしたいです。

- 1 その場の状況を再現する(ロール・プレーイング)機会を設けて理解に導き、勘違いを解く。
- 2 学用品の確認や、それをめぐるトラブルを回避するための工夫をする。
  - (1) 学用品の有無のトラブルを回避させるための教室環境を設定する。
  - (2) 「不注意」で準備する物を忘れてたり、必要な物を確認したりすることの苦手な子どもには、本人との話し合いで、覚えやすくするための方法や、持ち物を確認するための対応を決め、家庭との連携で習慣化を図るようにする。
- 3 対象児の理解力や認知特性を踏まえ、活動のルールや約束を理解しやすくするよう工夫する。
  - (1) ルールや約束を表や図に表す。
  - (2) 必要な箇所に目印をつけ印象づける。
  - (3) 気の合う級友が助っ人になり、活動の手引きを行う。
- 4 乱暴な言動をしてしまう時の気持ちや、乱暴な言動を受けた時の自分の気持ち、乱暴な言動を受けた相手を気遣う自分の思いなどを、ことばで表現できるようにする。



### 事例1 [即座のロール・プレーイング]

廊下にいたAさんは、互いにふざけながら、自分の方を指差しながらしきりに何かを言っては笑い転げる友だちを見て、いきなり駆け出した。自分をからかっていると勘違いしたAさんは、「今、見て笑ったな、何だお前なんか」と一方的に叩きトラブルになってしまった。それを聞いた担任は以下のように対応した。

- ① ふざけて遊んでいた友だちにそれを再現させ、Aさんが怒った場面に気づかせた。
- ② Aさん役を友達が務め、自分のしたことの理解を深めさせ、お互いの気持ちと相手に与える影響をしっかりとわかるようにした。
- ③ 友だちへの謝り方や仲直りをする方法は、学級会で話し合い、提案例を参考にして実行することにした。

### 事例2 [環境設定]

学用品をめぐるトラブルは、小・中学校問わず問題になる。忘れ物が多く、整理整頓の苦手な子には、事態の改善を図るための個別指導は必要であるが、同時にトラブルのために学習が停滞することは避けたいものである。

- ① 環境の調整を図る。

例えば、各自が使用する机の間隔を適度に離して配置する。わずかの物理的距離が個人の境界となって、問題を回避するばかりでなく友だちの領域、自分の領域を理解し、お互い必要以上の接触を回避し学習に集中できる環境にもなる。しかも、これが各自の心理的距離となってプライバシーが尊重される。

- ② 学用品の紛失等で学習活動が停滞することを避けるために、学習に必要なある程度の学用品を学級でも準備しておき、誰でも使用できるようにする。学用品の種類や数はそこに明記し、係りを決めて確認していく。

### 事例3 [気持ちを言葉で表す学習]

つい乱暴な言動になってしまったり、乱暴な言動を受けたりした時の気持ち、乱暴を受けた友だちを気遣う気持ちや乱暴を止めて欲しい気持ちなどを、言葉で表現できるようにするための学習をする。

例1 教師：乱暴な言動になってしまう時って、どんな気持ち？

子ども：理解できずに混乱して。いらいらして。自信がなくて。等

例2 教師：ばか、へたくそ、うるさい等と言われ時、どんな気持ちがする？

子ども：びっくりする。くやしい。腹が立つ。不愉快。等

例3 教師：押されたり、叩かれたり、蹴られたりした時、どんな気持ちかな？

子ども：痛い、怖い、くやしい、悲しい

例4 教師：乱暴な言動を受けたり、見たりした時、どう言うかな？

子ども：止めて、しないで、等

## 1 1 「落ち着きがなく集中できない子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 授業中に立ち歩いたり、廊下で物音がすると気になり教室から出て行ってしまったりする。
- ・ すぐに注意がそれてしまい、学習に集中できないことがある。
- ・ 一つの物事に、注意を集中しつづけることが困難である。

### 理解のヒント

◇ ラッセル・A・バークリー氏によると、「注意集中」の過程は、『焦点づけ→対象の選択→注意の持続と気を散らすものへの抵抗→次の対象への移行』といった一連のスキルで成り立っていると言われていています。注意集中困難の問題を考える際の参考になります。

- ・ 提示された課題に意識が集中できないために、課題に取り組み始めの時点でつまづいてしまう。例えば、黒板に注意を向けるべきときに、隣の子が気になって注意がそこから移せない場合等、適切に注意を向けるべき対象の選択ができないと、学習について理解することが難しくなる。
- ・ 焦点づけや選択ができて、周りの動きや物音、自分の体の感覚等、外的・内的刺激に影響を受け、注意の持続が困難になる。
- ・ 一つの課題が終わると新たな課題に注意を移行していくが、この移行が困難な場合、終えたはずの課題に留まり、次の学習課題についていけない事態が起こる。

### 支援を考えるためのヒント

自分勝手な行動を続ける子どもの中には、わざとやっているのではなく、わかっているのに止められず勝手な行動をしてしまう子どもがいます。また、多動や注意に問題を持っている子どもは、不器用さ、自己評価の実態、虐待、薬物治療等についても考慮することが重要です。

- 1 多動な子の中で、運動を好む場合、集中する授業の前に体を思いっきり動かすと落ち着く場合がある。
- 2 注意集中の問題は、注意集中メカニズム（「理解のヒント」参照）を参考に、次のような支援が考えられる。
  - (1) 刺激の種類や提示方法を工夫して注意の焦点化を図る。
  - (2) 注意を向ける対象を明確にし、不必要な刺激をなくすよう、環境を工夫する。
  - (3) 注意の持続が困難な場合、集中力の限界（時間、取り組みの姿等）を理解した上で指導の配慮や活動の工夫を図る。

## 事例 1 [授業中・休み時間]

立ち歩いたり、突然教室から出たりする1年生のAさんへ、以下の支援を行った。

- ① 学習活動への参加態勢をつくり、課題完了のうれしさを知り、自分もできるという自信を高めるようにした。
  - ・ 教室から不要な刺激を取り除き、落ち着ける座席の選定等、環境調整を図った。
  - ・ 学習課題や先生の指示が理解できない場合、得意な入力方法を確かめ、聴覚や視覚での指示の出し方を工夫した。
  - ・ 課題や指示はスモールステップにし、最後までやりとげるよう声がけを行った。
- ② 教室から出て行ったり、興奮していたりする場合は、止めるのではなく落ち着ける場所に誘導した。出て行った時は、校内連絡体制で、対応し安全を確保した。
- ③ 肯定的で親和的な関係を築き、Aさんの情緒の安定と行動の自己制御力を培ってほしいという願いをこめ、教室から出て行く時の決まりや約束について話し合い、カードを作成した。
- ④ 出て行く時は、担任にそのカード見せてから行き、行った場所の先生にサインをもらうようにした。また、戻ってきたら担任にカードを見せるようにした。
- ⑤ 授業では、着席して課題に取り組んだり、みんなと一緒に活動したりすることができた場合には、ごく当たり前のことでもその都度ほめ、望ましい行動の形成を図った。
- ⑥ 担任との信頼関係ができたなら、教室から出て行きそうなタイミングを察知した場合に教室内でできる用事を頼んだり、穏やかな口調で活動を促したりした。
- ⑦ 休み時間には、教師の仲立ちで友だちとかけっこや鬼ごっこ、縄跳びなどの遊びをとおして仲間意識と本児の存在感を高めるようにした。

## 事例 2 [授業中]

学習時、注意を集中し続けることの難しい小学生のBさん

知的発達・言語理解力は年齢相応である。好きな音楽や体育以外の授業では注意散漫で、国語や算数、社会の授業では、注意集中の持続は長くて10分程度である。文字や図形の認知に問題があり書字にも困難がある。

指導・支援を以下のようにした。

- ① 机には学習に必要な物だけを置き、不要な物はしまわせる。  
座席は前列で担任の近くにする等の環境調整を行う。
- ② 授業は、聞く、読む、話す、書く、発表する等、一定の流れを示して見通しを持つことができるようにするとともに、集中力の限界を踏まえた個別の声がけや、課題を変えて気分を切り替え、やる気を喚起して、集中力アップに繋げるようにする。
- ③ 書字については、適切な文字サイズを吟味するとともに、マス目のノート、マス目黒板を使用する。必要に応じて個別指導を行い、集中して学習する体験を増やす。
- ④ 好きな音楽や体育の授業では、意欲的な取り組みと出来栄をほめ・認めて、これが他の教科学習の意欲と集中力を高めることになるようにした。

## 1 2 「自分を抑えることが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 自分の思い通りにならないと、興奮してかっとなり、相手に乱暴な言葉を浴びせたり、そばにいる子を叩いたりする。
- ・ 担任が話している最中や級友の発表中に、思いついたことを一方的に言う。

### 理解のヒント

- ◇ 子どもが起こす様々な行動には、訴えたいメッセージが込められていたりします。
- ・ 自分の思いを通したい言動は、欲しい物やしたい活動等に結びついている。
  - ・ 勝手なおしゃべりや発言は、周囲の状況より自分の思いを優先させたり、自分自身が認められる場を求めてのものだったりする。
  - ・ 感情や行動のコントロールが苦手。
  - ・ 自分の思いを通したいあまり、強引な行動をとったり、友だちとの関係を孤立させたりする。

### 支援を考えるためのヒント

気になる行動だけに注目せず、適切な行動にも目を向け肯定的評価をして、適応行動を習得できるようにして、問題行動の減少と予防に繋げることが大切です。特に、自分を抑えることの苦手な子には、感情や行動をコントロールする力を身につけ、自己管理能力を高める指導が重要です。そして、得意なものを活用して、良かったこと・出来たことを評価し、良い自己イメージを形成して自尊心を育て、自信と意欲を回復させていくことが求められます。

- 1 動きのある楽しい運動等を行い、動と静の動きや相手に合わせる動き、さらには交代、順番、待つ等を経験することで、自己統制力を高める。
- 2 担任との人間関係をしっかりと構築することで、結果の受け入れ、気持ちを立て直す方法、望ましい行動等を学び、自己管理能力や社会的な適応行動を培っていく。
- 3 物や活動の要求の際には、フェアであることが原則である。一方的にその子の要求を満たすのではなく、事情に応じて幾つかの条件や方法を提示し、自分で選択したことについて約束した上で、それをかなえるようにする。こうした指導・支援は、担任への信頼を基にその信頼を深めて、問題行動の軽減を図り、社会的な適応行動の獲得が培われていく。更に、自分が選んだ解決策の好結果により、さわやかな気分や落ち着きをもたらされ、自己価値観も育っていく。
- 4 強がりや乱暴な言動が目立つ子どもも、助けてくれたり、教えてくれたりする担任への信頼感が深まると、それらが不思議なほど減ってくる。

## 事例1 [運動遊び]

ボール遊びが大好きな小学4年生のAさん。ゲームでチームが負けそうになり、自分の出番でもないのに勝手にボールを横取りして蹴り出した。それを友だちから注意され、興奮して暴言を吐き、殴る蹴るの大騒ぎになった。先生がなだめに入ると余計興奮して悪たれ口をたたくので、ゲームは中止になってしまった。

① 担任は、落ち着くまで冷静に待ち、落ち着いたら自分の行動を振り返り、出来事の因果関係に気づくようにする。

② どうすればいいかを話し合い、担任の指導のもとに、守る事柄や約束事の項目をまとめ、点検やメモも記入できるカードを作成して、これを実行する。

これらを繰り返すことで、ルールを理解、行動の自己評価、自己コントロールする望ましい言動や自己評価等を学び、適切な言動の習慣形成を図っていく。

- ・ カードの約束項目例：順番を守る。友達のをボールを横取りしない。審判や友だちに文句を言わない。失敗した友達を責めない。大声でなく優しく教える。たとえ負けたとしても我慢する、等。

③ 気持ちを立て直すための言葉を理解し、言葉で自分の気持ちをコントロールすることが可能になっていく。

- ・ 重要な手がかりとなる言葉の例：今度頑張る。負ける時もあれば勝つ時もある。負けても気にしない、勝負は時の運。負けは負け。僕は〇年生だから大丈夫、等。

## 事例2 [授業中・その他]

Bさんは元気な小学2年生。授業中に教師が話している最中や、友だちが発表している場面でも、自分の言いたいことがあると一方的にしゃべってしまう。その場の状況や相手の気持ちよりも、自分の思いを優先してしまうBさんに次のように対応した。

① 小学校低学年位の時期は、ほめて育てることを原則とする。

② 学習への参加態勢の形成を図る指導の中で、自己コントロール力を育てる。

- ・ 授業では、課題と活動内容を明確にし、見通しを持てるようにする。
- ・ 話を聞く態度や発言のルールを決めそれを教室に掲示する。話したくなった時にどう振る舞うかリハーサルをして印象づける。必要に応じて反復練習の機会を設ける。
- ・ サインカード（話を聞くときに提示する口を閉める絵カードや、発言を控えるときに提示する×印の絵カード等）を作成し、必要に応じてこれらを提示し、話を聞く態度や発言のルールを思い出すとともに言動を修正することができるようにする。
- ・ それでも私語を止めない場合は、上手な聞き方の子をほめ、場の状況に注目できるようにして聞き方のルールを守るよう促す。ルールが守れたら、すかさずほめる。

③ 話したい気持ちを大事に受け止め、それを伸ばすように支援する。

- ・ 話したいことを書き言葉（文章）に換え、順番に発表する機会をつくる。

④ 本人の努力をみんなの前で認め、級友にもその頑張り知らせるようにする。

## 13 「人との関わりが苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ ケンカになるなどトラブルが多い。
- ・ 特定の人に同じことを何度も繰り返して話しかける。
- ・ 休み時間や放課後など一人でいることが多い。

### 理解のヒント

◇ 「人との関わりが苦手な子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。

- ・ 自分なりに想像する世界があり、その中で楽しく過ごすことはあっても、仲間と一緒に楽しく活動した経験が少ないため、一緒に遊んだり活動したりする必要感があまりない。
- ・ どのように話しかければよいか、どのように関わるとよいかわからない。
- ・ 相手が今どんな気持ちでいるのか想像することが難しい。
- ・ 伝えたい思いが強く、相手の気持ちを考えずに衝動的に言ってしまう。
- ・ メガネや髪型等相手の部分的なことが気になり会話に集中できない。

### 支援を考えるためのヒント

人にどう関わると喜ばれ、自分の思いをどのように表現すると相手に上手く伝わるのか等は、具体的な関わり方の積み重ねを通して学んでいくものです。しかし、「人との関わりが苦手」な子どもは、「何を考えているのかわからない」「ぶっきらぼう」等の誤解を受けたり、振る舞い方や表現の仕方が不器用なだけでなく、その時の成功経験や失敗体験を別の機会に応用して活かしたりすることが困難なことも予想されます。

そこで、「ロールプレイ」や「ソーシャルスキルトレーニング」等、意図的に場面を想定してよりよい関わり方を学ばせたり、実際の生活の場で起こったことを振り返らせたりすることが大切です。

- 1 意図的に場面を想定し、トラブルのないよい体験を積み重ねる。
  - (1) 具体的な場面を設定し、台詞を入れたシナリオを作る。
  - (2) 役割を替えて相手の立場も経験する。
- 2 実際の生活の場で起こったことを振り返る。

うまくいったことやうまくいかなかったことを簡単に記録し、うまくいかなかったことについてはどうすればよかったかを具体的に考えて書き留める。
- 3 人との関わりを楽しめる簡単なゲームを行う。
- 4 周囲の子どもたちに、その子の良さを知らせるとともに、共同学習における具体的な支援方法について伝える。

### 事例1 【仲のよいクラスを作る挨拶】

教室中が明るい挨拶で溢れる仲のよいクラスをめざして、次のような教室掲示を行い、学級経営を進めてきた。

- ① 仲のよいクラスを作る5つの挨拶 ～挨拶に心をのせて届けよう～  
「おはよう」「ありがとう」「ごめんなさい」「だいじょうぶ」「またあした」
- ② 挨拶名人の心得（例）
  - ・相手の顔を見て挨拶します。
  - ・自然に笑顔になります。
  - ・挨拶されたらすぐに返します。

### 事例2 【ありがとうの実 ～よいところ探しの名人】

模造紙に大きな木を描き、廊下に掲示し、近くにリンゴの形をした付箋を準備していつでも誰でも「ありがとう」の気持ちを書いて貼るようにする。書く内容は「相手の名前と自分の名前」、「いつ」、「どんなことがうれしかったのか」等である。違う色と形の付箋も準備しておき、その付箋にはメッセージを読んでうれしい気持ちになった人が自分の名前を添えて書き、そのリンゴの近くに貼るようにする。

学年によっては、たくさん書いた子どもを「よいところ探しの名人」と称してクラスの中で紹介することもできる。

発展形として、授業中に書いた作文や絵、作った工作などにも付箋に感想を書いて貼ることもできる。また、「いいね」とほめられた作品の制作者が付箋を読んだ感想を別の色の付箋に書いて貼るのもよい。

### 事例3 【振り返りノート、ロールプレイ】

人とうまく関わるのが苦手で、ちょっとしたことで口げんかになってしまう時、放課後に、担任のところに行って話をしながら今日一日を振り返り、簡単にノートにまとめるようにしている。

- ① ノートの裏表紙には『短気は損気。大らかに』と書く。
- ② ノートには、「ア 日付」、「イ できごと」、「ウ その時の自分の思い」、「エ 相手の思い」、「オ 今度同じような場面ではどうしたいか」等を書く。
- ③ 最後に必ず「これで大丈夫。またひとつ大人になりました。」と書き加える。  
「ウ・エ・オ」は教師の助けを借りながら書くが、書き終わって小さな声で読んでみると気持ちがスッキリする。
- ④ 必要に応じ、担任が上手な解決法のシナリオを書いて簡単な劇にする。登場人物は二人で、担任と二人で演じる。主人公はその子どもだが、相手の役の立場も想像させ、時には演じるようにする。そうすることで相手の気持ちも少し分かるようになる。  
(※ 相手役も演じるかどうかは子どもの様子を見て決める。)

## 1 4 「集団での活動が苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 運動会でみんながダンスをしている時に、離れた場所に座って土いじりをしている。
- ・ 仲間が力を合わせて作品を作ったり、合奏や劇の練習をしたりしている時にふざけたり、離れた所で一人で遊んでいたりすることがある。
- ・ 親しい友だちが少なく、休み時間や放課後等一人でいることが多い。

### 理解のヒント

- ◇ 「集団での活動が苦手な子ども」は「自分勝手（わがまま）」「集団意識が低い」「友だちを必要としない」等の誤解を受けがちです。「集団で活動するとはどういうことなのか。具体的に何をすればよいのかわからずに困っているのかもしれない」という、本人の立場から、その困難さの理解に努めましょう。
- ◇ 「集団での活動が苦手な子ども」の困難さには、次のことが考えられます。
  - ・ みんなと一緒に行動しようとしても何をしたいかわからない。
  - ・ 自分のペースがあり、それを変更してみんなの動きに合わせるのが苦痛である。
  - ・ ひとつのことを持続してやり遂げることが苦手である。
  - ・ 一人ですることが好きで、誰かと協力して活動する楽しみがわからない。

### 支援を考えるためのヒント

集団の中で自分がどんな動きをすればよいか具体的なイメージが持てないために、何もしていないいたり、勝手なことをしたりする場合があります。いつ、どこで、何をどのようにすればよいのか、具体的に指示することが解決につながる場合があります。

- 1 その子どもが理解しやすい方法で、具体的な活動の仕方を伝える。
  - (1) その子がわかる言葉で、ゆっくり、はっきり、簡潔に話す。
  - (2) 実物、写真、絵、キーワード等を提示しながら話す。
- 2 仲間と協力して作り上げる喜びを体験する機会を作り、仲間意識を育てる。
  - (1) ルールが簡単なゲームで遊ぶ。
  - (2) その子どもも楽しめるような特別ルールを作って遊ぶ。
- 3 リーダーシップとフォローシップを育てる。
  - (1) リーダーはまとめ役として、「みんなの意見を聞く」「話し合いを進める」「自分から動く」「グループの仲間が仲よく協力して活動できるように指示したり、助けたりする」
  - (2) リーダー以外は「リーダーに協力する」「自分の意見をはっきり言う」「自分勝手な行動はしない」
  - (3) 集団になじめない友だちがいたら、みんなでその友だちをフォローする。
  - (4) 上記の内容を子どもたちと話し合い、簡潔な言葉にまとめて教室に掲示する。



### 事例1 〔簡単ルールの赤帽鬼〕

複雑なルールを理解するのが苦手で、タッチされるたびに鬼が交代すると今は誰が鬼なのかわからなくなる子どものために、ルールをできるだけ簡単にし、鬼が一目で分かるように「赤帽鬼」を考えた。

「鬼にタッチされた人が鬼になる」普通の「鬼遊び」と違い、「タッチされたら鬼は赤白帽子を『赤』にしてかぶり、鬼がどんどん増えていく」というルールである。鬼以外は『白』の帽子をかぶり、お互いに区別が付きやすい点がポイントである。

スタート時の鬼の人数を2～3人とする方法もある。また、鬼同士話し合っ、挟みうちにしたり、待ち伏せをしたりといった作戦を練ることもできる。ゲームに慣れてきたら、センターサークル内をセーフティゾーンにしたり、手つなぎ鬼のルールを追加したり、と少しずつルールを変えたり追加したりしていくこともできる。

### 事例2 〔存在感と仲間意識を育てる係活動〕

小学校5年生のAさんは給食が大好きで、好き嫌いが無い。給食を朝からとても楽しみにしている。クラスに配られる献立表はひと月分まとめてあるので文字が小さく、近くで見ないと分からない。そこで、給食係は毎朝、学校のコンピュータで「今日のメニュー」を大きな文字で作成し、教室に掲示した。

最近では給食委員のアイデアで、文字だけでなく、牛乳、ご飯、パン、ハンバーグ、サラダ、みそ汁等の絵をつけることになり、コンピュータが得意な友達に手伝ってもらいながら、カット集から絵を選んで一緒にプリントアウトして掲示している。

### 事例3 〔周りの子どもたちへの支援〕

集団での活動が苦手な子どもであっても、その集団で楽しく生活することができるクラス作りをめざし、子どもたちと話し合う場面を取り入れながら学級経営を進めた。

「どんなクラスを作りたいか」について、子ども達の意見集め、以下のようなキャッチフレーズを作成した。

- ① 「クラス全員が揃って初めて〇年〇組」
- ② 「あなた（一人一人）が楽しいとみんなが楽しい」クラス
- ③ 「みんな違ってみんないい」「みんな違うからいいクラス」
- ④ 「同じ色がいくら集まっても同じ色だけど、違う色が集まると新しい色ができる。めざすは虹色クラス」

## 15 「会話がつながらない子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 話の輪の中に加わっているように見えても、よく理解していないことがある。
- ・ 親しい友だちをつくるのが苦手で、休み時間など一人でいることが多い。
- ・ 話を聞きもらしてもそのままにしてしまうために、約束事や連絡を十分に理解していないことがある。

### 理解のヒント

- ◇ 「会話がつながらない子ども」の困難さの要因として、次のようなことが考えられます。
- ・ 聞き取りが苦手で、相手が話していることがよく理解できないことがある。
  - ・ 自分の思いをうまく言葉で相手に伝えることが困難なことがある。
  - ・ 話すことに意欲が持てない。
  - ・ 相手の思いを誤解して受け止めたり、反対に誤解されたりしてしまうことがある。
  - ・ 一度気まずくなった相手との関係を修復することが苦手なことが多い。

### 支援を考えるためのヒント

「会話がつながらない」子どもは、「話をしてもつまらない」「何を考えているのかわからない」「本当にわかっているのかどうかかわからない」等の誤解を受けがちです。無理に話をさせようとしたり、矢継ぎ早に質問をしたりせず、答えやすいような雰囲気作りに努めましょう。また、会話がつながる喜びを自信にして次のステップに進みましょう。

- 1 答えやすいように質問を工夫する。
  - (1) 一度に行う質問は一つにし、はっきり、ゆっくり、簡潔に話す。
  - (2) 話をする前にその子に呼びかけて、聞く準備を整えてから話す。
- 2 会話の楽しさを経験することで会話する意欲を育てる。
  - (1) 無理に話をさせようとしない。
  - (2) その子が関心のある話題で楽しい会話の機会を意図的に設定し、楽しい雰囲気に触れる機会を作る。
  - (3) その子が話し始めようとした時やその子が話す場面になった時は、急かさずじっくり、それでいてさりげない態度で待つ。
- 3 その子が話をしたら、話の内容をしっかりと受け止めたことを伝え、自信が持てるようにする。

話の途中で、何を話したいのかわからなくなってきた様子が見られたら、「つまり『○○・・・○○』ということかな？」と簡単にまとめてあげて、それでよいかどうかを確認するとともに、さりげなく表現方法の手本を示す。

### 事例1 [授業の中での取り組み]

人前で声を出すことに苦手意識がある小学4年生のAさん。授業や生活の中では、教科書の音読から始め、慣れてきたらノートに書いた答えを読むことにも挑戦する方法を、次のような段階を踏んで、少しずつ自信が持てるようにした。

- ① 教科書を音読する。(どこを読むかは前日から話し合っておく。)
- ② 「はい」「いいえ」で答えることができる比較的簡単な問題を解く。
- ③ 二者択一の問題を解く。(列毎の指名にすると、自分が何番目に指名されるか見通しを持つことができ、同じ問題の答えを順に聞くことができるので安心する。)
- ④ ノートに書いた設問に対する答えを発表する。
- ⑤ 意見や考えに感想を言ってもらい、その感想に対して感想を返す。

(例) Aさん:「〇〇・・・〇〇です。」

担任:「感想はありませんか。」

Bさん:「Aさんの意見は素晴らしいと思います。私はAさんの意見を聞いてなるほどと思いました。」

担任:「今のBさんの感想を聞いてAさんはどう感じましたか。」

Aさん:「うれしいです。」

### 事例2 [おつかいの活用]

毎日、放課後に5～10分くらい、担任と話をする時間を設け、ちょっとした雑談や事例1のような計画について話し合った。また、保健室や職員室にいる教師への用事等を通して、担任だけでなく話ができる教師を増やした。

- ① 保健室へのおつかい(事前に養護教諭と連携しておく)  
「Cさん、保健室のR先生から、クラスの健康観察簿を借りて来て下さい。」
- ② 職員室へのおつかい(事前に職員室のK教諭にはCさんが行くことを話しておく)  
「Cさん、職員室のK先生に、この書類を届けて来て下さい。」
- ③ クラスメイトを呼びに行く  
「Cさん、教室にいるBさんを読んで来て下さい。」

おつかいが終わったら担任の所に戻るように伝える。実際に戻った時には「Cさん、ありがとう、助かったよ。」と感謝の気持ちを伝える。

### 事例3 [ホームルーム、終わりの会等での周りの子どもたちへの支援]

みんながお互いに安心して話ができる環境を作ってきた。

- ① 話をしている人の方を向いて聞く。
- ② 「何を話そうとしているのかな」と関心を持って聞く。
- ③ うなずいたり、「うん、そうだね」など相づちを打ったりしながら聞く。
- ④ 話し終わるまでせかさなで待つ。

## 16 「特定のことにこだわりがある子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 予定時刻にこだわり、終了予定時刻が過ぎても活動が終わらないと急に怒り出す。
- ・ 一日の日課（時間割）にこだわり、急な予定変更には抵抗を示す。
- ・ 「今日の給食はパン？」など、自分でもわかっていることを何度も尋ねる。
- ・ 整列の仕方、配布物の提出、一番等の順番・順序にこだわる。
- ・ 好きなことや得意なこと（食べ物、服、色、キャラクター、活動、音楽、出来事等）にこだわり、本来すべき活動に取り組めない。
- ・ 一度決めた約束やルールに極端にこだわったり、ルールの変更には抵抗を示したりする。また、守れない友達を激しく非難したり、注意したりする。

### 理解のヒント

- ・ 「そろそろ終わりだな」「その活動の次は〇〇だな」と自分なりに立てた見通しが崩れてしまい、「次に、何をどうするか」の修正ができずに困ってしまう。
- ・ 同じことを何度も繰り返し尋ね、同じ答えが返ってくることで安心する。
- ・ 好きなことや一度決めたことにはのめり込むが、それ以外は興味がないため、自分には関係ないものにとらえてしまう。
- ・ 言葉の理解力が不足している。ルールの意味を言葉通りとらえてしまい、暗黙のルール等がわからない。そのため、トラブルになったりする。

### 支援を考えるためのヒント

「こだわり」を悪いこと・認められないことにとらえ、叱責・注意を繰り返すと、ますます悪化することがあります。こだわりの背景を考え、周囲がこだわりを許容し、本人自身が自分で修正できるような手だてをとっていきましょう。

- 1 予定等へのこだわりには、以下のような対応を考える。
  - (1) 活動に見通しを持てるようにする。自己コントロール能力の向上を目指す。  
事前に次のことを伝える。
    - ・ 「時間が少し延びるかもしれない」、「学習の変更がある時は、説明します」
    - ・ 時間が延びそうな場合は、「あと〇〇分かかります」「△時△分に終わります」といった予告を口頭や板書等で示す。
  - (2) カレンダーや日々の予定表等に急な日程変更を書き込めるようにしておく。  
変更を受け入れることができたならプラスの評価をする。
- 2 順番・順序、勝負、ルール等へのこだわりには、以下のような対応を考える。
  - (1) 勝ち負けやルール等について、いろいろな場合があるという理解を深める。  
「みんなもやりたい、使いたい」「勝つ時もあれば負ける時もある」「話し合いでルールの変更がある」「友達に譲ることも大切なことである」等。
  - (2) 具体的な場面を想定し、対応の仕方を学ぶ。

### 事例1 〔日課の変更への対応 — スモールステップでの対応—〕

時間や日課にこだわりを示す小学3年生のAさん。学校行事が近づく時期になると時間割が気になり、「1時間目は〇〇」「2時間目は△△」と朝から何度もつぶやき、そわそわし始める。そこで…

- ① カレンダーに大きな行事名を書いて、前もって知らせておく。
- ② 週予定表で、全体に関わること、学年に関わること、学級に関わること等の連絡事項を記入して配布する。
- ③ 朝の会のうちに日課の変更が考えられる時は、「学年全体で〇〇の学習を行う予定です」、「今日の3時間目の学習は〇日に変更します」等、事前に知らせる。
- ④ 急な変更があった場合の対応の仕方、気持ちの落ち着かせ方等について箇条書きに表し、教えていく。

### 事例2 〔勝ち負けにこだわる〕

何でも一番でないと気が済まないため、ゲームでも、じゃんけんでも、負けるといらいらして、きまって大声を出してしまう。そこで、次のように接することにした。

- ① 「勝つ時もある、負ける時もある」ことを知らせる。また、負けた人や負けたチームにどんな声かけをすると相手がうれしいかを話し合い、実際の場面で使ってみる。
- ② 「2位が優勝」「一番負けた人が先頭」等といった「負けるが勝ち」のルール等を作り、学級活動や帰りの会等の中で、具体的な場面を設定して体験していく。
- ③ 具体的な場面を想定して、負けた時の対応の仕方を書いておき、事前に学校や家で読みながら確認する。それでもいらいらする時は、書いたものを見て、少しでも自分で落ち着けるようにしていく。うまくできた時は、それを認めていく。

### 事例3 〔決まった係以外をやろうとしない場合の対応〕

教室掃除では黒板消しとほうき係にがんばったものの、次の担当場所でもほうき係をやると言って譲らないため、清掃班のトラブルの原因になっている。そこで、担任は次のように対応することにした。

- ① 役割分担は班の中で決める。同じ仕事ばかりはできないことを紙に書いて伝える。
- ② クラス全員向けに清掃場所ごとのマニュアルを作成し、具体的な進め方を視覚的な絵や文字を手がかりに進められるようにする。
- ③ 決まった仕事しかしない場合は、「から拭きを手伝う」、「机運びと雑巾がけから選んで手伝う」といったカードから選択することで、自分の仕事の後に取り組む仕事を確認したり、時間の使い方を知らせたりする。

## 17 「片付け・整理整頓が苦手な子ども」への支援のヒント

### 子どもの具体的な姿

- ・ 机、ロッカー、ランドセルの中が乱雑で、いつも学習用具の準備に手間取る。
- ・ 持ち物をなくすことが多く、机の周辺に物が落ちていてもさほど気にならない。
- ・ 宿題等の提出忘れや、家庭への配布物が保護者に届かないことが頻繁にある。

### 理解のヒント

◇ 「片付けや整理整頓の苦手な子ども」の場合、だらしない、躰ができていないなどの誤解（低い評価）を受けがちです。子どもの様子をよく観察し、どこにつまずきがあるのか整理し、以下のような困難さの理解に努めましょう。

- ・ 自分の持ち物であることの意識が低い。
- ・ 今使う物（必要な物）と使い終わった物との区別がつきにくい。
- ・ 使い終わったら片づけるという習慣がまだ身に付いていない。
- ・ 準備や片付けの手順を上手にイメージすることが難しい。
- ・ 言葉で何度繰り返し教えても忘れてしまう（言葉の指示だけでは理解できない）。
- ・ 自分でやってみるものの、途中でわからなくなると面倒になったり、他の事に注意がそれて中断してしまったりする。

### 支援を考えるためのヒント

学級の中で「片付けが苦手な人、忘れ物の多い人」というマイナスのイメージが固定してしまわないよう、「こうすればいいのか。」とやり方に見通しを持ち、「うまくできた。」という達成感を味わうことができる方法を、子ども、そして保護者とともに見つけていきましょう。

- 1 使う物（必要な物）と使わない物を自分で判断できるようにする。
  - ・ 教科書、文房具など教科ごとに使用する物を透明な「整理バッグ」にまとめる。「整理バッグ」には、教科名や入れる物の名前を明記する。
  - ・ 教科別に色分けした時間割表と対応した色シールを貼る。
  - ・ ランドセルの裏蓋等へ毎日持ち帰るものの一覧表（文字や絵）等を付け、確認できるようにする。
- 2 落とし物や忘れ物を軽減できるようにする。
  - ・ 自分の持ち物にわかりやすい目印を付ける、筆箱内にミニチェック表を入れて確認できるようにする、必要最低限の数量だけ用意するといった工夫を図る。
  - ・ 連絡メモを取るよう習慣化を図る。関係者の点検欄と自己評価欄を設ける。
  - ・ プリント類の配布を工夫する。使いやすい連絡ファイルや提出物用クリップを使用する。
- 3 整理整頓の意識化を図る。また、習慣化のために個別の言葉かけを行う。整理整頓ができたなら、明確に賞賛する。その際、家庭との連携を重視する。

### 事例1 〔一人でできる学習の準備〕

机の中がいつも乱雑で学習用具の準備に手間取る3年生のAさん。友達から「またあ？早くしてよ。」の声に次第に不機嫌になっていく様子を見た担任は、次の手だてを取った。

- ① Aさんと一緒に、机の中の専用の引き出しに「持っていく物・置いておく物」の仕切りを付ける。
- ② 教科書やノート、筆箱、色鉛筆などの絵を貼り置き場所が一目でわかるようにする。
- ③ ロッカーの奥板やフックにも絵や整理されている状態の写真を貼り、見通しを持って片付けられるようにする。
- ④ 教科別の持ち物をまとめて入れるビニルバッグ（色違いファスナー、教科名・内容名シール）を使い、終わった物からランドセルにしまうようする。

### 事例2 〔持ち物は必要最小限にする〕

持ち主不明の落とし物は「落とし物BOX」に入れ、帰りの会で持ち主を確認しているY先生。ほとんどがBさんの物ということがあったので、Bさんが劣等感を持たず、また、友達から特別視されずに整理整頓の力を身につけることができるよう、保護者の協力を得ながら次のようなことに取り組んだ。

- ① Bさんの筆箱の鉛筆は必要最小限の5本とし、それぞれに記名と番号シールを貼る。
- ② 鉛筆を通す筆箱内の輪にも番号シールを貼り、何番の鉛筆がないのかわかるようにする。
- ③ 三角定規やのり、給食用マスクなどは小さくて紛失しやすいので、自分の持ち物とわかる目印をつけたり、母親から内容物の絵を刺繍してもらった専用の袋に入れたりする。

### 事例3 〔休み時間・給食・清掃 ～学級みんなで整理整頓～〕

保護者に手つきの丈夫な紙袋を準備してもらい、机の周りに落ちているものはひとまずその中に入れるようしているCさん。見通しを持ってできるよう以下のことを学級全体で取り組んだ。

- ① 学級内外で見かける諸表示は、みんながわかりやすく行動できるようにするためのものであることを、事前に学級全体に知らせる。
- ② 学級共用の物品（マジック、セロテープ、画鋏等）の置き場所や図書コーナーなどには文字や絵、写真などで望ましい整理整頓の仕方を示す。
- ③ 給食の食器の片付け方や清掃時の床の掃き方、雑巾のかけ方、黒板の拭き方の手順を示す番号を、給食台や床、黒板の縁に貼る。

### Ⅲ 参考になる資料

#### 【文部科学省関係の報告等】

- 「学習障害児等に対する指導について（報告）」 平成 11 年  
学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する  
調査協力者会議
- 「21世紀の特殊教育の在り方について ～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り  
方について～」 平成 13 年  
21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議
- 「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」 平成 15 年  
特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議
- 「小・中学校における LD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備の  
ためのガイドライン（試案）」 文部科学省 平成 16 年
- 「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」 中央教育審議会  
平成 17 年

#### 【国立特殊教育総合研究所関係書籍】

- 「自閉症教育実践ガイドブック 今の充実と明日への展望」 平成 16 年
- 「LD、ADHD、高機能自閉症の子どもの指導ガイド」 平成 17 年
- 「特別支援教育コーディネーター 実践ガイド」 平成 18 年
- 「特別支援教育コーディネーター 養成研修マニュアル」 平成 18 年
- 「プロジェクト研究報告書（H16～17年度）特別支援教育コーディネーターに関する実際」  
平成 18 年
- 「プロジェクト研究報告書（H16～17年度）個別の教育支援改革の策定に関する実際的研究」  
平成 18 年
- 「プロジェクト研究報告書（H15～17年度）小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児  
童生徒の指導に関する研究」 平成 18 年
- 「小・中学校における障害のある子どもへのアプローチ「特殊学級」「通級指導教室」に  
よる指導・運営の Good Practice」 平成 18 年

#### 【山形県教育委員会発行物】

- 「一人一人に応じた教育 学習上特別な配慮が必要な子ども達への指導の充実をめざして」  
平成 10 年
- 「学習のつまずきや落ち着きのなさが目立つ子供たちについて」（リーフレット）  
学習障害（LD）注意欠陥多動性障害（ADHD）の理解のために：赤版 平成 13 年
- 「学習のつまずきや落ち着きのなさが目立つ子供たちについて 第2号」（リーフレット）  
学習障害(LD)児、注意欠陥/多動性障害(ADHD)児の支援のために：青版 平成14年
- 「LD児、ADHD児等の支援の在り方についての研究（H12～14の3年研究）」山形県教育  
センター 中間報告 平成13年 中間報告（2年次）平成14年 最終報告 平成15年



## おわりに

平成18年6月に学校教育法の一部が改正され、平成19年4月1日より、全ての小学校、中学校、高等学校および幼稚園において、教育上特別の支援を必要とする子どもに対し、障がいによる学習上または生活上の困難を克服するための教育を行うことが規定されました。本資料が、各教職員による学校や学級における子どもたちへの支援に役立てられることにより特別支援教育が充実していくことを期待しています。

最後に、本資料の作成に関わり、ワーキンググループ会議での貴重なご意見、そして原稿執筆をはじめとして多大な労をとっていただいた委員の皆様には深く感謝申し上げます。

県教育庁 義務教育課

### ワーキンググループ委員

- 千田 久子（羽陽学園 短期大学 非常勤講師）
- 三浦 光哉（山形大学 地域教育文化学部 教授）
- 梅津 一義（山形県立米沢養護学校 教諭）
- 三浦 祐一（山形県教育センター 指導主事）

### 事務局

- 鈴木 弘康（山形県教育庁義務教育課 課長）
- 齊藤 隆（同 課長補佐）
- 佐藤 敦（同 主任指導主事）
- 村形 緑（同 指導主事）
- 早川 隆（同 指導主事）
- 高橋 真琴（同 指導主事）
- 池田 友子（村山教育事務所 指導主事）
- 大石 英輝（最上教育事務所 指導主事）
- 濱田 芳郎（置賜教育事務所 指導主事）
- 加藤 弘人（庄内教育事務所 指導主事）

発行日 平成19年3月